

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.174

2007年11月

第5回東京フォーラムを開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

目次

●ニュース

第5回東京フォーラムを開催	3
ノースカロライナ州立大学及びノースカロライナ大学チャペルヒル校と 産学連携協定を締結	4
愛知医学校・愛知病院記念碑完成記念式典を挙げる	5
平成19年度名古屋大学地震防災訓練を実施	6
大学院留学生特別コース学位記授与式を挙げる	7
平野総長が改修後の北部厚生会館1階店舗を視察	7
岡本エコトピア科学研究所客員教授と八島工学研究科教授が Thomson Scientific Research Front Award 2007を受賞	8
第14回経営協議会および第6回総長選考会議を開催	8
平成19年度名古屋大学掛長研修を実施	8

●学生の元気

名古屋大学女子陸上競技部 全日本への道	9
安川 裕子（農学部応用生物科学科3年）	

●知の先端

植物の形作り	10
佐藤 豊（大学院生命農学研究科准教授）	

●部局ニュース

附属図書館が2007年秋季特別展を開催	12
国際シンポジウム「中国の経済発展と所得格差」を開催	13
言語文化フォーラムを開催	13
地域貢献特別支援事業 北海道陸別町で講演会を開催	14
農学国際教育協力研究センターが第5、6回オープンセミナーを開催	14
留学生日本語研修コース開講式を挙げる	15
キャンパスの国際交流の促進を目指したワークショップを開催	15
博物館野外観察園の見学会を開催	16
愛知医学校・愛知病院新築移転130周年記念碑完成記念講演会	16
医学部、献体者の冥福を祈り解剖弔慰祭を挙げる	17
地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」第3回講演会を開催	17
第21回博物館コンサート「和と洋の融合」を開催	17
第12回博物館企画展「ふしぎふしぎミクロの美術館～電子顕微鏡で見る いきものの世界～」	18
「ミクロの探検クラブ」	
第74回名古屋大学博物館特別講演会「放散虫のカタチ」～プランクトンの世界～ 講演会を開催	
第13回博物館企画展の初日に講演会を開催	19
第32回、第33回防災アカデミーを開催	19
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成19年9月16日～10月15日	20
●イベントカレンダー	24
●ちょっと名大史	
伊勢湾台風と名古屋大学	28

第5回東京フォーラムを開催





名古屋大学東京フォーラムが、10月19日(金)、東京都港区の政策研究大学院大学において開催されました。

第5回となる今回は、「アジアに繋ぐ知の架け橋～飛翔するアジア諸国への法整備支援～」と題して、本学が取り組む、日本とアジア諸国との新しい関係を築き上げるための様々な先駆的事業のうち、文部科学省の支援を得て進行している「アジア法整備支援プロジェクト」等を取り上げ、日本司法の国際化をめぐる動向などを中心に、アジアにおける本学の諸活動を紹介しました。

本フォーラムには、来賓として、松浪健四郎文部科学副大臣、江崎鐵磨衆議院議員、稲葉一生法務省法務総合研究所国際協力部長が来臨されました。

平野総長からの挨拶、来賓からの祝辞に続いて、ワッタナ・カンボジア司法大臣から「カンボジアに対する日本の法整備支援」、アフメドフ・ウズベキスタン司法副大臣から「ウズベキスタンに対する日本の法整備支援」、ロック・ベトナム元司法大臣から「ベトナムに対する日本の法整備支援」について、記念講演が行われました。

引き続き、鮎京法政国際教育協力研究センター長から「アジア法整備支援プロジェクト」、松浦法学研究科長

から「日本法令の外国語訳プロジェクト」について、報告がされました。さらに、テレビ会議システムを使ったモンゴルの日本法教育研究センターとの中継による会談が実演されました。

また、ハワイエにおいてパネル展示が行われ、(1)大学院法学研究科をはじめ、アジアを活動フィールドとする本学の諸活動の紹介、(2)ベトナム、モンゴル、ウズベキスタン、カンボジアといった本学の法整備支援対象国である各国大使館の協力による各国文化紹介がされました。

約300名の参加者で会場は満席となり、名古屋大学のアジアに対する活動に改めて関心が寄せられるとともに、本学がこれらの学术交流を通じて一層の国際交流・協力事業を推進させることに期待が高まっていました。

フォーラム終了後に開催されたレセプションには、森山眞弓衆議院議員、馳浩衆議院議員、中山恭子参議院議員、小野元之日本学術振興会理事長、佐藤禎一東京国立博物館長、ジグジッド駐日モンゴル国大使をはじめ多くの関係者が出席し、留学生による民族舞踊が披露されるなど、大盛況となりました。



	2	3
1	4	5

- 1 会場の様子
- 2 挨拶する平野総長
- 3 レセプションの様子
右から3番目が中山恭子参議院議員
- 4、5 パネル展示の様子

ノースカロライナ州立大学及びノースカロライナ大学チャペルヒル校と 産学連携協定を締結

9月20日(木)、平野総長らがアメリカを訪問し、ノースカロライナ州立大学及びノースカロライナ大学チャペルヒル校との間でそれぞれ産学連携に関する協定を締結しました。

これは、今般、米国ノースカロライナ州に国際産学連携のための本学の拠点を設置されることを契機に結ばれたものです。お互いの地域における産学連携に貢献することを期待し、それぞれの大学において独自に創出される知的財産、さらには共同研究を通じて創出された知的財産の活用及び商業化を通じて社会に貢献することを目指すものです。また、両地域の産業界及び研究機関に関する情報を共有して、新技術及び産業の創出を支援するとともに、それぞれの大学間の教員及び事務職員の交流をも促進しようとするものです。

同州には、極めて成功したサイエンス・パークとしてリサーチ・トライアングル・パークがあり、バイオテクノロジー、化学、ナノテクノロジー、環境科学、IT関連等の



ノースカロライナ大学チャペルヒル校 平野総長とトニー・ウォルドロップ
研究・経済開発担当副学長



ノースカロライナ州立大学 平野総長とジェームズ・L・オプリングー学長

分野で大学、産業界、州政府が密接に協力するネットワークが形成されています。これらのネットワークを活用し、名古屋大学は、東海地域の基幹総合大学として、本学はもとより東海地域の関係大学、さらに海外の大学の技術シーズ・特許と、海外企業や東海地域の企業のニーズについてのマッチングのためのゲートウェイを提供するとともに、海外企業の誘致を目的とするグレーター・ナゴヤ・イニシアティブでの海外の企業やベンチャーと東海地域の企業とのマッチングの支援を拡充する考えです。特に、海外企業への大学の技術シーズ・特許の情報発信、共同研究、受託研究の発掘、大学の特許のライセンスを進めることとしています。

今回協定を締結したノースカロライナ州立大学は、農業、工学、生命科学、繊維分野で高い研究実績を上げており、本学とは既に、学術交流に関する全学交流協定を結んでいます。ノースカロライナ大学チャペルヒル校は、バイオテクノロジー、医療、医薬品分野で優れた研究実績をあげており、本学とは医学部同士の学術交流協定が結ばれています。今回は、産学連携のため、多角的で包括的な連携を日本と海外の両大学との間で行うもので、今後の国際的な産学連携の進展に向け、大きな一歩を踏み出すものです。

愛知医学校・愛知病院記念碑完成記念式典を挙



堀川側から見た記念碑

名古屋大学の前身である愛知医学校・愛知病院の記念碑完成記念式典が、10月9日(火)、同址地前の堀川河岸で挙

行されました。同記念碑(磁器陶板製。縦2メートル、横3メートル)は、愛知医学校・愛知病院が明治10年に堀川東岸へ新築移転後130年を迎えたことを記念して、特定非営利活動法人名古屋外科支援機構により建立の上、本学に寄贈されたもので、式典は本学の創立70周年記念事業の一つとして執り行われ

ました。式典では、平野総長の式辞、山口晃弘名古屋外科支援機構理事長の挨拶に続いて、来賓として、神田真秋愛知県知事および松原武久名古屋市長から祝辞をいただきました。この中で、神田知事は、この記念碑の建立は、愛知県の医療の歴史と名古屋大学の足跡を後世へ伝えるものであり、大変意義深いものであると述べ、また、松原市長は、この記念碑が、船から見える堀川の史跡の一つとして市民がまちの歴史を再発見し、名古屋のまちに愛着を深め、賑わいを取り戻すきっかけになることを期待していると述べました。

続いて、記念碑建立に中心的な役割を果たした塩野谷恵彦本学名誉教授・名古屋外科支援機構顧問から、記念碑の概要などについて説明がありました。

さらに、総長から、記念碑を本学へ寄贈された名古屋外科支援機構の山口理事長と、記念碑建立に際して社有地を無償貸与された株式会社トーエネックの野田泰弘取締役社長へ、それぞれ感謝状が贈呈され、最後に、総長、来賓によるテープカットが行われました。

記念碑の表面は、愛知病院におけるアルブレヒト・フォン・ローレツ、後藤新平、司馬凌海らによる外科手術の様子が描かれた陶板、裏面は、愛知医学校・愛知病院址の説明文となっており、堀川に面して設置され、名古屋に西洋医学が移入された明治初頭を彷彿させるものとなっています。

【名古屋大学の源流 ー愛知医学校・愛知病院址ー】

本学が名古屋帝国大学として創立されたのは1939(昭和14)年ですが、その淵源は1871(明治4)年開設の名古屋藩仮病院・仮医学校にまでさかのぼります。その後、西本願寺掛所(別院)をへて、1877(明治10)年に、市内天王崎町(現在の名古屋市中区栄一丁目)の堀川東岸の高台へ新築移転し、愛知医学校・愛知病院が開設されました。

敷地はおよそ18,800平方メートルあり、堀川河畔の街路に面した表門を入り、植え込みに囲まれた道を右に登ると病院が、左にとると医学校がありました。和洋折衷の建物は、出入り口や窓枠にアーチが取り入れられ、白漆喰にガラス窓の二階建て建築で、堀川河畔の高台にその偉観を誇りました。当時「河の病院」と呼ばれ、人々に親しまれました。

お雇い教師ローレツらの指導で西洋医学が広められ、この地域の医療行政も大いに刷新されて、新しい医療への信頼が高まりました。

1914(大正3)年に現在医学部のある鶴舞に移転するまでの37年間、名実ともに医学の殿堂として医学教育と医療活動における輝かしい足跡を残しました。



テープカットの様子

平成19年度名古屋大学地震防災訓練を実施



IB 電子情報館で行われた防災講演の様子

地震防災訓練が、10月10日(水)、東山地区、鶴舞地区、大幸地区、豊川地区、留学生会館及び国際嚶鳴館において、実施されました。

この訓練は、本学構成員の防災意識の高揚を図るとともに、マニュアルなどに定められた災害発生時の基本的な対応手順を確認し、対応能力を向上させることを目的として、平成15年度から実施しているものです。今年度の訓練では、勤務（講義）時間中に、名古屋市内で震度6弱の揺れとなる地震が発生したという想定で、情報伝達、安否確認、避難、部局独自の訓練等が行われました。

当日は、午前10時37分に地震が発生したという想定で訓練がはじまり、直ちに平野総長から災害対策統括本部設置の指示が出されました。訓練開始の情報は、電話、FAX及び東山キャンパス内に設置した屋外防災無線装置（日本語・英語）で伝えられ、建物によっては館内放送も利用されました。訓練終了後は、IB 電子情報館において、飛田災害対策室員による防災講演会や起震車による模擬地震体験が行われ、多数の教職員、学生が参加しました。

今回の訓練では、学生及び教職員の安否確認について、新しいシステムを使った訓練も実施されました。情報連携統括本部と災害対策室が開発を進めたシステムで、「名大

ポータル」の一部を使い、自分の安否情報を携帯電話から登録できるようにしたものです。昨年からの試行を経て、今回は全部局を対象に、システム側から登録を呼びかける「発信型」の安否登録訓練を行い、多数の安否情報が登録されました。また、名古屋市消防局の協力のもと、普通救命講習Ⅰ（成人コース・3時間）の出張講習が、東山地区において実施されました。150人の定員に対し、昨年同様、申込みが殺到し、定員オーバーで受講できなかった人も多数でため、来年度以降も継続して実施する予定です。

今年度は、各部局独自の防災訓練も多数実施され、避難訓練、消火訓練をはじめ、エレベーター閉じこめを想定した訓練や、脱出袋による降下体験訓練なども行われ、参加者は真剣な面持ちで訓練に望んでいました。さらに、災害対策室で作成した「地震時の対応ガイド」（4パターン）をもとに、各部屋のマニュアルを作成したり、地震防災についての啓発教育を行う部局もありました。

東海地域においては、東海地震・南海地震などの巨大地震による大規模な地震被害の発生が危惧されています。今後も、大学組織としての対応能力向上のために定期的な防災訓練を続けていく予定です。



起震車による地震体験の様子



災害対策統括本部の移動訓練



消火訓練の様子

大学院留学生特別コース学位記授与式を挙

平成19年度名古屋大学大学院留学生特別コース学位記授与式が、9月26日(水)、野依記念学術交流館2階カンファレンスホールにおいて、総長、理事、監事、副総長、研究科長らの列席のもと挙行されました。

本学には、現在、大学院における外国人留学生のための英語による特別コースが、大学院法学研究科博士課程(前期課程)綜合法政専攻、大学院医学系研究科修士課程医科学専攻、大学院工学研究科博士課程(後期課程)社会基盤工学専攻及び大学院環境学研究科博士課程(後期課程)地球環境科学専攻で開設されており、平成9年度からは、海

外の入学・修了時期に合わせて、9月に学位記授与式を行っています。

授与式では、修了生のうち、大学院法学研究科の5名及び大学院医学系研究科の15名に修士の学位記が、大学院工学研究科の3名及び大学院環境学研究科の1名に博士の学位記が、平野総長から一人ひとりに授与され、次いで、本学での課程を修了したことへの祝いの言葉と、本学で学んだ知識や技術をさらに研鑽し、母国のみならず、世界の発展のために力を発揮されることを希望する旨の激励の言葉が贈られました。

これを受けて、修了生を代表して大学院法学研究科のミルクルバノブ ザファルさん(ウズベキスタン共和国)が、日本での研究生生活、指導教員や学生との交流など留学中のエピソードを交えた謝辞を述べました。

閉会後には、総長をはじめとする列席者、陪席の指導教員、修了生の家族等を交えて記念撮影が行われるなど、厳粛な中にも和やかな雰囲気となりました。



握手する平野総長と修了生代表



記念撮影

平野総長が改修後の北部厚生会館1階店舗を視察

9月25日(火)、平野総長が、杉山理事、高橋理事らとともに、北部厚生会館1階の店舗を視察しました。

北部厚生会館は、東山キャンパス北部地区の福利厚生施

設として、昭和52年に建てられました。運営は名古屋大学消費生活協同組合(名大生協)に業務委託されており、1階は文具・生活用品・旅行サービス等の店舗、2階は学生食堂として、毎日多くの学生及び教職員に利用されています。

今回の視察は、名大生協の寄附による1階店舗フロアの30年ぶりの全面改装を機に行われました。

改装工事は9月3日から2週間にわたって行われ、「自然と創造」をコンセプトとして、大理石、アイボリーを基調とした明るく爽快な雰囲気の色調、利用しやすい店内配置、フードサービス分野の充実等が特徴となっています。

総長らは、まず、店舗入口の右側の棚に並べられた、名古屋大学のネーム入りの各種商品を見た後、今井名大生協専務理事の説明や、一行との歓談を交えながら、時折足を止め商品棚を見て回りました。

最後に、今後も引き続き福利厚生施設の充実について、本学と名大生協がお互いに協力することを確認して視察を終えました。



視察の様子

岡本エコトピア科学研究所客員教授と八島工学研究科教授がThomson Scientific Research Front Award 2007を受賞



表彰状を受ける岡本客員教授（左）

岡本佳男エコトピア科学研究所客員教授と八島栄次工学研究科教授が、Thomson Scientific Research Front Award 2007を受賞しました。

同賞は、トムソンサイエンティフィックが、飛躍的な発展が期待される最先端研究領域（リサーチフロント）を牽引する研究者に対して贈るもので、2回目となる今回は、10のリサーチフロントが選ばれ、16名の研究者が発表されました。

岡本客員教授と八島教授は、「機能性らせん高分子の発見、設計と合成」というリサーチフロントの形成に多大な貢献があったことで同賞を受賞しました。

なお、表彰式は、9月19日（水）、東京丸ビルホールにて開催された学術シンポジウム「日本の優れたリサーチフロントを称えて」において行われました。

第14回経営協議会および第6回総長選考会議を開催



経営協議会の様子

第14回経営協議会が、9月24日（月）、名古屋市内のホテルを会場として開催されました。

会議では、平野総長の挨拶の後、本学を取り巻く最近の主な動向、目的積立金による執行予定事業案、平成20年度入学定員の変更、法科大学院の認証評価（本評価）について、各担当理事から説明が行われ、審議の結果、了承されました。

続いて、高橋理事から、平成18事業年度に係る業務実績に関するヒアリング、人事院勧告、平成19年度経営状況、平成20年度概算要求、本学における大学教育改革支援プログラム採択状況について報告が行われました。

また、外部委員からは、法人評価等の在り方、地域連携創薬科学研究科の設置に係る他大学との連携、学生の基礎教育の重要性等について、貴重なご意見が多数寄せられました。

なお、同日には第6回総長選考会議も行われ、教育研究評議会・経営協議会での審議結果を受けて、総長に対する中間評価が行われました。

平成19年度名古屋大学掛長研修を実施



研修風景

平成19年度名古屋大学掛長研修が、9月19日（水）（全体講義）、20日（木）・21日（金）及び27日（木）・28日（金）（2グループに分かれた外部講師の講義）の3日間にわたり実施されました。

この研修は、本学の掛長級昇格職員に対し、職場リーダーとして必要なスキルを習得するとともに、実践を通してOJTの重要性について理解し、役割を担うために必要な業務効率化その他の知識を習得することを目的として今年度から実施しているもので、今回は52名が参加しました。

冒頭に高橋事務局長から講話があり、その後、内部講師による講義、本学についての知識を問うミニテスト、先輩職員からの経験に基づくアドバイスの披露などが行われました。

また、2日目以降は、外部講師により、コミュニケーションスキル・効率的な仕事の進め方についてグループワークを中心とした研修が行われ、積極的な意見交換がなされました。

名古屋大学女子陸上競技部 全日本への道

農学部応用生物科学科3年
安川 裕子



全日本大学女子駅伝に向けて、期待に胸を膨らませるメンバー

私たち名古屋大学陸上競技部は、9月2日に行われた全日本大学女子駅伝選考会において2位となり、東海地区の代表として全日本大学女子駅伝への出場が決まりました。

数年前から長距離の女子が集まり、この選考会に参加することができるようになりました。初めは駅伝を組めることの喜びを感じるばかりでしたが、2年前と一緒に練習している椋山学園大学が全日本大学女子駅伝に出場することとなり、私たち名古屋大学も全日本大学女子駅伝に出場したいと強く思うようになりました。そして、その目標を胸に秘めて一人ひとりが一生懸命練習を積んできました。

選考会当日は、東海地区の強豪私大を目の前にして緊張しましたが、監督を信じ、仲間を信じ、今までの練習の成果を信じ、また多くの皆様の応援の中で各自、精一杯走ることができました。その結果、昨年男子が出雲駅伝で繋いだ名古屋大学の襷を女子も初めて全国の舞台で繋ぐこととなりました。

全日本大学女子駅伝当日は、臆せず走ることができました。名大の襷を繋ぐことを目標としていましたが、全国のレベルは高く、3区から4区の間で襷を繋げることができず、皆とても悔しい思いをしました。しかし、たくさんの方々に祝福され、応援していただく中で、全国の舞台に立つ事ができ、良い経験となりました。

この経験を活かし、また来年も全国大会に出場できるよう、これからも日々頑張っていきたいと思えます。

出場メンバー

- 小山 倫代 医学部医学科5年生
- 天野 実咲 文学部人文学科4年生
- 上野舞里子 教育学部発達教育臨床コース3年生
- 金尾明日美 医学部保健学科3年生
- 徳永 絢子 医学部保健学科3年生
- 安川 裕子 農学部応用生物科学科3年生
- 山本しおり 医学部医学科2年生



ゴールを目指し力走する天野選手



メンバー全員の思いを胸に、23位2時間25分1秒でゴール

やすかわ ゆうこ
1986年生まれ
愛知県出身

植物の形作り

佐藤 豊 大学院生命農学研究科准教授

人間の形を頭の中に思い描いてみましょう。おそらくほとんどの人がほぼ同じようなヒトの形を頭の中に描いているはずですが、四歳になる我が家の娘も、もうだいぶ前からヒトの形を絵に描くようになっていました。最初は頭足人と呼ばれる顔に足が付いただけの絵だったのが、最近では手足や指などほとんどすべてのパーツを描くことができます（どこで覚えたのかアニメの登場人物にあるようなキラキラの瞳まで描くようになってしまったのは親としては少々複雑な思いもしますが…）。さて、本題です。今度は、植物の形を頭の中に思い描いてみましょう。本当はどんな植物でも良いのですが、導入部分で使ったヒトに対応させたいので、ここではイネの形を思い描くことにしましょう。この原稿を書いている今が収穫の秋真っ盛りであるためか、私は黄色く色づいた稲穂がこうべをたれている様子を想像しましたが、皆さんはいかがですか？ もしかしたら、7月頃の青々とした田んぼのイネを思い描いた方もいるかもしれません。この頃のイネにはまだ穂がありません。またある人は、葉っぱが3枚くらいしかない、田植えに使う苗をイメージした人もいるかもしれません。人間の基本的な体は成長に伴い大きさは変わっても構造は生まれたときから変化しません。すなわち動物では、形作りは基本的に生まれる前に終了します。このため、誰でも同じようなヒトの形をイメージできるのだと思います。ところが、植物の場合、一生のほとんどを通じて葉や花など新たな形を作り続けるため、成長に伴いその形が大きく変化します。これこそ、植物と動物の形作りの方法に大きな違いがあることに起因します。それでは、どうして植物は一生を通じて形作りを続けることができるのでしょうか？

植物の形を構成する基本的な要素となる葉・茎・枝は、植物の軸の先端（植物の一番先端とは少し異なるのですが、ここでは詳しい説明は省略します）にある茎頂分裂組織と呼ばれる幹細胞のような性質を持った細胞の集まりから作られます（図1）。この茎頂分裂組織にある一部の細胞が葉などの器官を作るのに使われますが、沢山作っているうちに茎頂分裂組織の細胞はだんだん少なくなってしまうのです。しかし、そこはうまくしたので、茎頂分裂組織では、器官を作るのに使って減ってしまった細胞を補いながら新たな器官を作っています。このように、自分自身の性質を維持しながら新たな性質を持った細胞を生み出すことができる点が、動物の幹細胞とよく似ています。こうすることにより、植物は一生のほとんどを通じて新たな器官を作ることができます。逆に考え

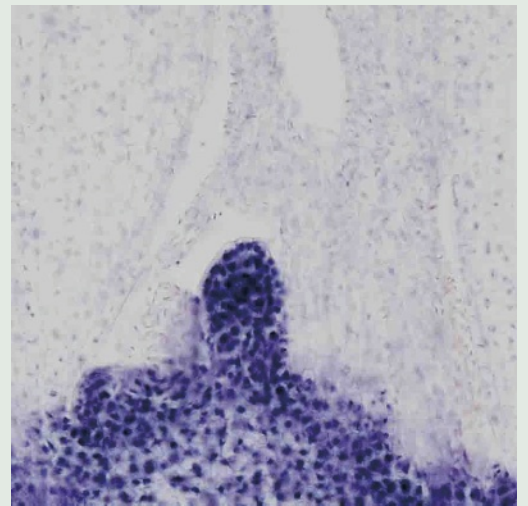


図1：イネの茎頂分裂組織
青く染色された細胞からなる中心のドーム状構造が茎頂分裂組織

ると、植物によっては動物と比べものにならないくらい長生きする物もありますが、このような植物が毎年沢山の葉を作ることができるのも、茎頂分裂組織がもつ幹細胞のような性質によるといえます。

このように、茎頂分裂組織は植物が形を作る上で中心的な役割を果たしており、植物の形作りの仕組みを明らかにするために多くの研究者が茎頂分裂組織に着目した様々な研究を行っています。私の研究テーマは茎頂分裂組織が形成される仕組みを明らかにすることです。茎頂分裂組織は種子の中にある胚が形成されるごく初期の過程で作られます。そこで、胚形成の過程で、茎頂分裂組織を特異的に欠失する突然変異体の解析を行いました。

私はイネを材料に研究を行っています。イネではこれまでに多数の変異体の蓄積が有り、その中には少なくとも3つの茎頂分裂組織を特異的に欠失する突然変異体（シュートレス変異体）が存在します（図2）。これらの変異体において機能欠損を起こした遺伝子を同定することにより、逆に茎頂分裂組織構築に必須な遺伝子の同定を試みました。その結果、同定した3つの遺伝子はいずれも昨年度ノーベル賞受賞研究であったことでも有名なRNA干渉を起こすのに必須の因子であることが明らかになりました。このことは、イネの茎頂分裂組織の形成がRNA干渉と類似した経路により制御されていることを意味しています。RNA干渉に関わる因子が植物の茎頂分裂組織構築に関わるという報告はこれまでになく、今回新たに明らかになった発見です。この研究成果は米国科学アカデミー紀要に掲載され、中日新聞、朝日新聞、日刊工業新聞でも一般向けに紹介されました。



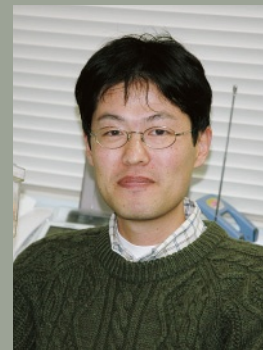
図2：左・野生型イネ胚、右・シュートレス突然変異体
青い矢印が茎頂分裂組織の場所を指している。

茎頂分裂組織の活動は、イネをはじめとするほとんどあらゆる作物にとってその生産性を大きく左右する葉や花などの器官の数や大きさに影響を与えることが知られており、その形成機構の解明は生産性の向上をめざして植物の地上部形態を戦略的に改良する上でも新たな方策の糸口となる可能性があります。この研究によってイネの形作りの基本的なメカニズムが理解され、それを利用することにより、将来イネの農業形質の改変に新たな可能性を切り開くことを期待しています。

最後に、本研究は名古屋大学生物機能開発利用センターの松岡研究室、北野研究室、東京大学大学院農学生命科学研究科の長戸研究室の協力の下に行われました。この場を借りて謝意を表します。

1998年名古屋大学生命農学研究科生化学制御専攻博士課程後期課程修了、農学博士、2000年日本学術振興会海外特別研究員（米国カリフォルニア大学バークレー校）、2002年名古屋大学生物分子応答研究センター助教授を経て2003年より大学院生命農学研究科准教授。
専門：植物分子遺伝学
趣味：魚釣り

さとう ゆたか



附属図書館が2007年秋季特別展を開催

●附属図書館

附属図書館及び同館研究開発室は、大学院文学研究科と連携し、10月1日(月)から19日(金)まで、2007年秋季特別展「『遊心』の祝福－中国文学者・青木正児の世界－」を開催しました。

青木博士は、魯迅、羅振玉、王国維、胡適、川端康成、土岐善麿など、日中のそうそうたる文人たちと交流しながら、「遊心」の境地で古典中国の広大な学的宇宙を自由自在に飛び回り、今日の中国学の基礎を築きあげた先覚者です。博士の没後、貴重な蔵書・資料は遺族により本学附属図書館に寄贈され、「青木文庫」として30有余年にわたり保管されてきました。資料は、日常の生活の中で得られたものが多くを占めますが、それゆえに、今日では現地の中国でも保管されていないような入手困難なものも見受けられ、博士の学術研究にとっても大きな意味があったことが、文庫の調査研究によりしだいに明らかとなりました。今回の展示では、そうした貴重な資料の展示を通じ、先駆的な国際交流、学術文化の普及を進めた博士の足跡と人間性を振り返り、現代の学術文化のありようを見つめ直す機会としました。



講演会の様子



展示会の様子

10月13日(土)には、同館多目的室において、永澄憲史京都新聞社南丹支局長による「陶然自楽として－ジャーナリストの目に映った青木正児－」と、井上進本学文学研究科教授による「好むことと知ること－青木正児の学問」と題する二部の講演が行われ、70名の参加者がありました。永澄氏の講演では、青木博士がどのような人々と交流しながら、きわめて独自性の強い学問研究を築いていったのかが、貴重な写真の上映を交えながら、熱心に語られました。井上教授の講演では、永澄氏の講演で触れられた事実もふまえながら、「好む」という主観と「知る」という客観が、青木博士の中でどのように一体化していたのか、考察が進められ、青木博士の中核には、他者の評価に左右されない自己の学術研究に対する確信のようなものがあつたのではないかと指摘されました。

本展示には、学生、教職員、一般の方々のほか、開催期間中に本学で中国文学関係の学会が行われたこともあり、その関係者も含めて、計628名の来場者がありました。本学の所蔵する学術資料が、現代にいたる学術研究の流れをふりかえり、さらに、将来への指針を得るうえでも、大変に貴重な手がかりとなることを確認できた、有意義な特別展となりました。

国際シンポジウム「中国の経済発展と所得格差」を開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センターは、10月5日(金)、6日(土)の2日間、キタン会ならびに大分大学経済学部と共同で、「中国の経済発展と所得格差」をテーマに国際学術シンポジウムを開催しました。今回のシンポジウムは総長裁量経費「中国の経済発展と所得格差に関する国際共同研究」の支援を受け、日本経済新聞社名古屋支社、株式会社サイマル・インターナショナルの協賛を得て行われました。

シンポジウム初日は、平野総長、李天然 駐名古屋中国総領事、阿部 誠 大分大学経済学部長の挨拶で始



国際経済政策研究センター・キタン国際学術シンポジウム
Economic Research Center & KITAN International Symposium
経済発展と所得格差
Development and Income Gap
平野総長の挨拶



シンポジウムの様子

まりました。続いて、本課題・シンポジウムを代表して薛進軍同センター教授から趣旨説明が行われ、続いてこの研究分野における著名な研究者らによる講演が行われました。ジョン・ナイト オックスフォード大学教授、張軍 国家國務院発展研究センター部長、李実 北京師範大学教授および本学 薛教授、園田准教授、荒山経済学研究科長の研究グループは、家計調査のデータに基づいて、中国の所得格差の要因は主に都市-農村分離の戸籍制度および教育の格差にあると指摘し、併せて戸籍制度の廃止および教育の平等化という政策を提案しまし

た。また、南亮進 一橋大学名誉教授、大竹文雄 大阪大学教授は、戦前の日本と今の日本の格差問題を分析し、所得不平等の広がり、相対的な剥奪感を、ひいては社会の不安定を招く可能性を持っており、中国の問題に対する日本の経験の意義を指摘しました。会場には、国内外から、専門家および関係者・学生・市民等約400人が参加しました。

言語文化フォーラムを開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、10月13日(土)、文系総合館カンファレンスホールと同館のオープンホールにおいて、言語文化フォーラムを開催しました。

金平茂紀株式会社 TBS テレビ取締役・報道局長による基調講演「テレビニュースは終わらない」では、テレビニュース・デスクや特派員として長年活躍された経験にもとづき、木鐸であるはずのメディアがビジネスとしていつも抱えている陥穽、事実を報道するはずの記者がその良心ゆえに事実を報道できなくなるジレンマが鮮やかに説明されました。この講演には他学部、他大学、一般企業から

も多数が参加し、会場は大いに盛り上がりました。

講演につづく発表会では、李澤熊留学生センター准教授、ロナルド・ジェフリー・スチュワート 県立広島大学講師、李善姫 韓国・建国大学校非常勤講師、水間千恵 白百合女子大学研究員の各氏が、先端の成果や研究手法について熱く語りました。発表者は、昨年度、数多くの著作・論文を発表した教員(いずれも修了生)及び昨年度に博士学位論文を提出した修了生から選考された優良研究者です。今回の発表は、在学生に対する研究意欲増進への格好の刺激剤となりました。



講演者 金平茂紀氏



名譽修了生 ロナルド・ジェフリー・スチュワート氏

このフォーラムは、大学院国際言語文化研究科の存在アピールと品質発信を兼ねた今年2回目の試みであり、参加者は約70名におよびました。フォーラムにあわせて発刊し配布した同研究科の「プロフィール2007」は、教員から修了生・在学生にいたるまでの成果・内実を公開するもので、フォーラムとドッキングして研究科をますます外と内にかかれた研究機関とする一助になっています。

地域貢献特別支援事業 北海道陸別町で講演会を開催

●太陽地球環境研究所

太陽地球環境研究所は、10月5日(金)、北海道陸別町と共催で、同町タウンホールにおいて、米国航空宇宙局(NASA)の宇宙飛行士で地球・宇宙物理学者であるジョン・フィリップス博士の講演会「宇宙での6ヶ月」を開催しました。

陸別町には同研究所附属陸別観測所がおかれ、宇宙や地球に対する町民の関心は高く、数年前から宇宙飛行士の講



講演の様子

演会が熱望されていました。フィリップス博士は、1996年に同研究所の客員教授として来日中にNASA宇宙飛行士候補に選ばれ、当時の招聘教員の上出洋介前所長(現在は京都大学特任教授)の仲介とNASAの例外的な配慮により同講演会が実現しました。NHKや北海道新聞社などが後援した今回の講演会には、陸別町だけでなく周辺の市町村からも500名近い参加者があり、会場は満席となりました。フィリップス博士は、ロシアの宇宙船ソユーズの打上げから宇宙ステーションに滞在した6ヶ月間の生活や船外活動、そしてステーションから見たオーロラや台風の美しさについて、写真を使ってわかりやすく説明しました。講演後にはあらゆる年代の参加者から多くの質問が寄せられました。

また講演会の前日には、陸別小学校で、フィリップス博士と子供たちとの交流会を開催しました。3年生から6年生までの約90名が参加し、宇宙食や実際に船外活動で使用された手袋を手にすることができ、会場は興奮と歓声に包まれました。また、宇宙生活には水はどれくらい持つていくのか(答えは、宇宙で造るのでゼロ)など、素直な質問が数多く出されました。最後にフィリップス博士は、20年後にこの中から宇宙飛行士が誕生することを願っているというエールを贈っていました。

農学国際教育協力研究センターが第5、6回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター(ICCAE)は、9月10日(月)、第5回オープンセミナーを開催しました。まず、アフリカ人造り拠点(African Institute for Capacity Development: AICAD)副研究開発部長のパトリック・ワク氏が、貧困削減を目指すAICADの活動や日本の支援・協力について説明しました。続いて、バイオヴァーシティ・インターナショナル兼ケニア国立博物館研究員でICCAE客員研究員のパトリック・マウンドゥ氏が、多種多様なアフリカの食文化と農業生態系について紹介し、多様な食物の摂取が農民の健康増進に繋がること、低利用作物の市場

開拓が農家の生計向上に貢献できる可能性があることを報告しました。

第6回オープンセミナーは、9月25日(火)、ウガンダから一時帰国中の坪井達史氏(JICAネリカ米適用化技術専門家)による「ネリカの特性とウガンダ及び東南部アフリカ諸国における普及状況」について行われました。気温(標高)、降水量、土壌pHを基にGISで判定した陸稲ネリカの栽培可能面積が予想以上に広いこと、農民が実際に使える栽培技術の確認と普及、農民が購入できる脱穀機の現地生産、農民が近くで精米し米を利用するようにと意図した

移動精米所の導入と試験運転など、現場レベルでの地道な稲作技術普及が力強く進んでいることがよく分かりました。それぞれのセミナーの質疑応答においては、アフリカの開発や農業の現状、ネリカの普及と利用について活発な議論が行われました。



第5回オープンセミナー会場の様子



質問に応える坪井氏

留学生日本語研修コース開講式を挙

●留学生センター

留学生センター外国人留学生第57期日本語研修コース及び第27期日本語・日本文化研修コース開講式が、10月9日(火)14時から文系総合館7階カンファレンスホールにおいて挙行されました。

日本語研修コースは、平成19年10月から平成20年3月まで、大学院に進学する前に日本語の基礎を学ぶ留学生と工

学部の進学を目指す日韓理工系学部留学生が日本語の基礎を受講します。日本語・日本文化研修コースは、母国で日本語を学習の上、平成19年10月から平成20年9月まで上級の日本語の教育と日本文化の研修を行うものです。

開講式では、始めに石田留学生センター長があいさつし、異なる言語を学ぶことは自分自身と相手を学ぶことであると述べ、今後の研修に対する激励の言葉がありました。

続いて、研修生全員が、名前と出身国を自己紹介しました。

開講式の後、留学生センター前テラスで留学生と石田センター長はじめ教職員との記念撮影が行われ、引き続き行われた懇親会では、受け入れ教員、同センターの教職員、研修を担当する日本語講師が懇談しました。



記念撮影

キャンパスの国際交流の促進を目指したワークショップを開催

●留学生センター、留学生相談室

10月12日(金)、学生による主体的なキャンパスの国際交流活動を促進するため、国際交流に関心のある学生を対象にワークショップ「もっともっと国際交流～名古屋大学でできること!～」が開催されました。ファシリテーターは阿部 仁一橋大学商学研究科講師、堀江未来留学生センター准教授、高木ひとみ留学生相談室講師が担当し、20名の学生が参加しました。ワークショップ冒頭では、「キャンパスの国際交流で自分は何を目指すのか、または何を徳たいのか?」というテーマについてブレインストーミング(フレームゲーム)を行い、参加者が考える「国際交流」について具体的にアイデアを出し合い、グループに分類していきました。さらに異文化理解に関する参加型のアクティビティ

を通して、普段は気づきにくい自分自身の中にある文化的な枠を発見する機会を持ちました。最後の全体ディスカッションでは、国際交流を身近に感じている学生だけではなく、より多くの学生が参加しやすい国際交流活動とはどのようなものかについて活発に意見を出し合い、自分たちの「枠」を超えた新しい国際交流活動の可能性を検討しました。参加学生からは「国際交流に対する固定観念が良い意味で壊された。国際交流に対する意識の高い人と意見交換ができ、刺激になった」、「すべてが想像を超えていた。いつもは一方的になりがちで、なかなか話せないようなことも今日は共有することができた」、「同じ関心を持った仲間と意見や情報を交換できて良かった」などの声が聞かれました。今回のワークショップに参加した学生の多くは学内で積極的に国際交流活動に関わっており、その経験に基づいた学生の声を、留学生相談室や留学生センターが直接聞くことのできる貴重な機会となりました。学生の国際交流活動はキャンパスの国際化に多大な貢献をしており、そういった活動サポートするため、今後も様々な研修等の機会を提供していく予定です。



ワークショップの様子



グループ発表する参加学生の様子

博物館野外観察園の見学会を開催

●博物館

博物館は、9月26日(水)、野外観察園の見学会を開催しました。

博物館野外観察園は、東山キャンパスの南西に広がる約4,000平米の緑地で、2006年から一般公開しています。今回の見学会は、実りの秋の観察園を歩きながら植物の果実や種子の分散方法を学ぶというテーマで開かれ、55名の参



へびウリの説明

加がありました。

例年になく残暑厳しい一日でしたが、植物の多くは実りの季節を着実に迎えていました。園内には、へびウリの1メートルにも伸びた果実が垂れ下がり、「生きた化石」として有名なラクウショウにも緑の若い実がたわわになっています。また「ドングリの小道」と呼ばれる見学路には、アバマキやコナラのドングリが転がり始めています。植物の分散には、種子を自分ではじき飛ばしたり、風に乗せたり、鳥や動物に運ばせるなど、様々な方法があります。これらの仕組みについて、見学者は園内をまわって実際に実や種を眺めながら、教員の説明を聞きました。今年の見学会は夏と秋の2回が対になっており、8月の会では花の仕組みと植物の多様性について学びました。今回の見学会には8月の会に参加した人も多く、花が実となって子孫を広げていく仕組みを一通り見ることで、植物の巧みな生活史に興味を持った方も多かったようです。会が終了した後も熱心に教員に質問する人や、園内に残って植物を観察する人が多く見られました。

愛知医学校・愛知病院新築移転130周年記念碑完成記念講演会

●博物館

愛知医学校・愛知病院新築移転130周年記念碑完成記念講演会が、名古屋大学博物館第80回特別講演会として、10月10日(水)午後、「愛知における西洋医学のあけぼの—愛知医学校・愛知病院新築移転130周年記念碑完成によせて—」と題して、特定非営利活動法人名古屋外科支援機構及び本学大学文書資料室との共催により開催されました。これは、副題にもあるように、名古屋外科支援機構が当該記念碑を建立して本学に寄贈したことを記念したものです。

除幕式の翌日にあたり、博物館講義室に約55名が参集して、熱気のこもった講演会となりました。

山口拓史大学文書資料室員の司会により、山口晃弘 名古屋外科支援機構理事長の挨拶の後、「名古屋における西洋医学の移入」(羽賀 大学文書資料室長)、「博物学者ローレツ」(西川博物館長)、「名古屋における司馬凌海」(高橋 昭 名誉教授)、「外科医としての後藤新平」(塩野谷恵彦 名誉教授)の講演が行われました。

とくに、両名誉教授は、記念碑の碑文に紹介されている司馬と後藤が名古屋時代にどのような足跡を残したかを、逸話や新しい知見を交えて詳しく語りました。ふたりの人柄の深部までが彷彿とする味わい深い講演で、参加者に深い感銘を与えました。



挨拶をする山口名古屋外科支援機構理事長



講演をする塩野谷名誉教授

医学部、献体者の冥福を祈り 解剖弔慰祭を挙行

●医学部



祭主挨拶を述べる濱口医学部長

医学部は、10月11日(木)午後、医学の教育研究のために御献体された故人を慰霊するため、解剖弔慰祭を執り行いました。秋晴れの中、本年度も御遺族をはじめ、教職員、学生ら約400名が参列し、故人の御冥福をお祈りしました。

祭儀では、濱口医学部長から「医学への御献体に対し心からの敬意と感謝の意を捧げるとともに、医学医療の進歩・発展及び医師・医学研究者の育成のために一層努力する覚悟であります。」と慰霊のことばが述べられました。

また、学生を代表して中村 優君が「多くの方々のご協力のもとに医学を学ぶことに感謝し、御献体くださった皆様の御遺志を無駄にしないよう今後とも勉学に励み、将来の医療の発展のために努めていきます。」と御霊と御遺族に対して誓いました。祭儀に引き続き、解剖供養塔に御遺族、教職員及び学生がお参りしました。

なお、今回供養された献体数は、系統解剖54体、病理解剖37体で、医学部創設以来の献体総数は16,954体となりました。

地域貢献特別支援事業「都市近郊の 農業教育公園」第3回講演会を開催

●生命農学研究科附属農場



講演会の様子

大学院生命農学研究科附属農場は、9月22日(土)、附属農場農業館において、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」の一環として、「資源動物を知り、食のちを考える」をテーマとした講演会の第3回を開催しました。

今回は、大蔵 聡生命農学研究科准教授が「家畜から学ぶ親子の絆」と題して、ヒトが野生動物を家畜化していった歴史や、現代の家畜にまだに残る野生の特性を理解して畜産物の生産につなげる重要性を、身近な話題を挙げながら解説しました。ウシ、ヒツジ、ヤギの母親は自分の産んだ子のおいを記憶することによって、母子間の強固なつながりができることや、においやフェロモンなどの化学物質による情報伝達が、家畜の行動や体の機能の調節に大切な手段となること、ビデオなどを交えて紹介されました。

講演後は、地域の方々が中心の30名を越える参加者から質問が相次ぎ、家畜のもつ不思議な能力に興味尽きない様子でした。

第21回博物館コンサート「和と洋の融合」 を開催

●博物館



コンサートの様子

博物館は、10月12日(金)、尺八(河西明風)、琴(岡田玉千栄都)、ピアノ(神山雅子)、バイオリン(安藤郁乃)、タブラ(吉香正臣)による「和と洋の融合」コンサートを開催しました。5人の奏者は曲や楽器の解説を交えながら、息のあった演奏を披露しました。

約170人の聴衆は、和楽器の尺八・琴と洋楽器のピアノ・バイオリンに、タブラというインド太鼓を加えた5種類の楽器の奏でる絶妙なハーモニーに触れ、「和と洋の融合」を実感していました。同時に、和楽器と洋楽器の音色の違い、一見同じような琴でも邦楽的な音のするものと洋楽的な音のするものが使い分けられていたことも理解できました。今回のコンサートでは、河西明風氏作曲の『Island of Deity』という和楽器と洋楽器のコラボレーション用の曲も披露され、博物館コンサートならではの“実験的”演奏も楽しむことができました。

第12回博物館企画展

「ふしぎふしぎミクロの美術館～電子顕微鏡で見るいきものの世界～」

「ミクロの探検クラブ」

博物館は、8月2日(木)、3日(金)の2日間、「ミクロの探検クラブ」を開催し、小学生から大学生まで延べ41名が参加しました。

2日の「レーベンフックの顕微鏡を作ろう」ではペットボトルとガラスビーズを使った顕微鏡作りに挑戦しました。さらにタマネギの細胞や自分の皮膚のレプリカなどを観察し、300年前のミクロの世界を体験しました。また現在の生物顕微鏡を使って同じ試料を観察し、見え方の



当日の様子

違いを実感しました。さらに、ラットの組織標本を観察し、参加者はどんどん顕微鏡の世界に引き込まれていきました。3日の「いろいろな動物細胞の赤血球を見よう」では、フナの血液塗抹標本を作り、あらかじめ作ってあった標本(カエル、ウズラ、ラット)の赤血球と見比べました。参加者はこのクラブのために作られたテキストにより分類や進化なども考察するようになりました。食い入るように顕微鏡をのぞく受講者、また、自分で作ったレーベンフックの顕微鏡と携帯電話のカメラを使い、上手に顕微鏡写真を撮影する受講者もあり、若い人の好奇心と集中力、さらにホンモノを体験することのすばらしさをあらためて感じさせるイベントとなりました。

この企画は8月21(火)、22日(水)にも、電子顕微鏡(SEM)3台をそろえて行われました。

第74回名古屋大学博物館特別講演会「放散虫のカタチ」～プランクトンの世界～

博物館は、8月11日(土)、第74回特別講演会「放散虫のカタチ」～プランクトンの世界～を、新潟大学から松岡 篤教授を迎えて開催しました。

本学博物館には世界に誇る放散虫化石の収蔵があり、インターネットを通じ、全世界から放散虫化石コレクションのデータを見ることが出来ます。また、今回の企画展「ミクロの美術館」でも、その画像データ(電子顕微鏡写真)の一部を展示しました。現在、世界における放散虫化石の研究者は約300名、97パーセントが地質学者で、残る3パー

セントが生物学者(10名)です。化石と現生の放散虫の間にある大きな壁に挑戦している松岡教授の講演は、「放散虫と何か」から始まり、現生の放散虫の飼育の様子、カタチによる生活(捕食)の違い、放散虫化石の年代目盛り、大陸の移動まで、基礎的なことから研究の最前線まで、大変分かり易いものでした。それに続く質疑応答では、約50名の聴衆から活発な発言があり、参加者の知的好奇心を刺激する有意義な機会となりました。

講演会を開催

博物館は、8月28日(火)に「博物館はセラピスト-本物がいやす人の心」、9月4日(火)に「放散虫革命-微化石の放散虫が日本列島の歴史を大きく変えた」と題した講演会を開催しました。

足立 守 博物館教授の講演では、まず、音楽・絵画などの芸術、本物の良い標本、自然には人の心を癒す効果があり、これをミュージック・セラピー(Muse therapy)と呼んで本学の博物館活動で重視しているという話から始まりました。次に、物事の理解には五感のすべてを使った体験

(観察)が不可欠で、カンカン石という金属音のする火山岩を叩いてマグマの特徴を理解する話や、立体視メガネを使って濃尾平野の地下構造を重力異常立体視図から体感する話に、聴衆は聞き入っていました。

水谷伸治郎名誉教授の「放散虫革命」の講演では、1970年代末～80年代前半に本学で行われた放散虫化石の研究が、それまでの日本列島の古生代～中生代の歴史を大きく変えたことが、「革命」前夜の話や中国・ロシア国境地帯における現地調査のエピソードを交えてわかりやすく解説しました。さらに、こうした放散虫化石の研究が走査型電子顕微鏡の活用によって可能になったことや環太平洋造山帯の研究に大きく貢献したこと、放散虫化石がアンモナイトと肩を並べて地学の教科書に登場するようになった科学史的解説に、聴衆はうなずいていました。



カンカン石の板を叩いて講演をする足立教授



講演する水谷名誉教授

第13回博物館企画展の初日に講演会を開催

●博物館

博物館は、10月2日(火)～13日(土)、諏訪兼位本学名誉教授によるアフリカのスケッチを中心にした企画展「諏訪兼位 アフリカの旅－スケッチと短歌－」を開催しました。諏訪名誉教授は、1962年以來、アフリカ大陸を研究のフィールドとし、エジプトから南アフリカに至る10ヶ国以上において地質学の調査・研究を行い、調査の合間に、アフリカの大地や人の印象をスケッチブックに記録し、その時々を思いを短歌にしました。この企画展は約40枚のスケッチと12首の短歌、そして短歌に登場するアフリカの石を組み合わせたユニークなクロスカルチャー展示となりました。



講演をする諏訪名誉教授



ギャラリートークをする諏訪名誉教授

初日の10月2日(火)には、諏訪名誉教授が「科学を短歌によむ」という講演を行いました。講演は短歌に興味を持つきっかけとなった若山牧水の話から始まり、続いて短歌を日記代わりに詠んで投稿する作歌のすすめ、そして短歌に詠まれたアフリカの自然・風景・人が多くのスライドを使って解説されました。臨場感あふれる講演によって、約60名の聴衆は皆アフリカを訪れた気分になっているようでした。講演に関連して、樋口敬二本学名誉教授から、科学研究の要点を俳句にする「俳句アブストラクト」という提案を雪氷学会で行った話が披露され、聴衆は、物事の本質を短い文字数で表現することの重要さと、その道のプロとプロでない人では、同じ景色や現象を見ても違った俳句や短歌になることの意味を考えていました。

同日の最後には、企画展の会場に移動し、諏訪名誉教授が展示中のスケッチと短歌のすべてについて詳しい解説をギャラリートークとして行い、熱心な聴衆は芸術の秋を満喫していました。

第32回、第33回防災アカデミーを開催

●災害対策室

災害対策室は、9月12日(水)、第32回防災アカデミーを、環境総合館レクチャーホールにおいて開催しました。今回は、小泉尚嗣博士(独立行政法人産業技術総合研究所地震地下水研究グループ長)による「地下水で東南海・南海地震を予測する」と題した講演が行われました。

過去の地下水の記録を調べると、大地震の前後で水位が大きく変化した例が存在します。中には、地震の発生に先駆けて変化したと考えられる例も知られています。今回の講演では、そういった実際の観測事例とその発生メカニズムをわかりやすく解説するとともに、次の東南海・南海地

震に向けて、今、どんな観測が準備されているのかが紹介されました。

続いて、10月15日(月)に、第33回防災アカデミーが開催され、川口 淳 三重大学准教授による「地域の防災力向上のために～地域圏大学 三重大の挑戦～」と題する講演が行われました。

川口准教授は地域住民や企業関係者との共同研究を通じて地域防災力の向上に取り組んでいます。講演では高齢化が進む漁村における災害時用援護者避難対策についての事例や、観光客も含めた海岸利用者の津波避難対策に関する事例について、多くの写真に基づいてその様子が紹介されました。防災アカデミーには地域の防災リーダーが多数出席しており、「今回の講演から活動発展のヒントが得られた」という感想が聞かれました。



講演する小泉尚嗣博士



聴衆で埋め尽くされた会場と講師の川口三重大学准教授

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
1 中日新聞を読んで：中西久枝・国際開発研究科教授 「語り」が最強の防災力	9.16 (日)	中日 (朝刊)
2 今年のノーベル賞有力候補に名城大学教授・飯島澄男・本学特別招聘教授と戸塚洋二・東京大学教授	9.16 (日)	読売
3 般若心経のころ：愛知学院大学教授・立川武蔵氏・本学卒業生 俗から聖への宗教実践	9.16 (日)	中日 (朝刊)
4 科学技術振興機構は、2007年度産学協同シーズイノベーション化事業に本学と豊田合成の「次世代窒化物半導体パワーデバイスを顕在化する非晶質薄膜 / 窒化物半導体界面の研究」など35件を採択	9.17 (月)	日刊工業
5 本学 米ノースカロライナ州立大学、ノースカロライナ大学と産学連携協定を締結	9.18 (火)	日刊工業
6 名大サロンの主役：金井篤子・教育発達科学研究科教授 極端な実態に危機感	9.18 (火)	中日 (朝刊)
7 NAGOYA 学生街プランコンテスト2007～恋する学生街@本山～24日開催	9.18 (火)	中日 (朝刊)
8 春秋：鳥取砂丘落書き評	9.18 (火)	日経 (朝刊)
9 活写：高木賢治さん・本学大学院生	9.18 (火)	中日 (朝刊)
10 本学 名城大学と共同で「地域連携創薬科学研究科」を新設 2012年春から学生受け入れ	9.19 (水)	日刊工業
11 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「21世紀の創造」の「高校生講座 野依教室」開催：理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授	9.19 (水)	読売
12 「激論 法科大学院」20日開催：本学など名古屋市内の法科大学院5校の教員が座談会	9.19 (水) 9.21 (金)	中日 (朝刊) 読売
13 本学、東京大学、名古屋工業大学など10以上の産学連携チームで、内視鏡とロボットを組み合わせた「インテリジェント手術機器」の開発に取り組む	9.19 (水)	朝日 (朝刊)
14 妊婦の救急搬送について愛知県の神田知事は、「『地域周産期母子医療センター』で対応ができないときは、本学などが担っている『総合周産期母子医療センター』に搬送する仕組みをとる」と話す	9.19 (水)	中日 (朝刊)
15 竹内恒夫・環境学研究科教授と院生らが、名古屋市内の放置自転車を有効利用し、市内に設けられた駐輪場間を自由に乗り降りできる「名チャリプロジェクト」を計画	9.19 (水)	毎日 (夕刊)
16 丹羽利充・医学部附属病院准教授が松本勇賞を受賞	9.20 (木)	中日 (朝刊)
17 吉川徹・医学部附属病院助教と尾崎俊雄・三重大学准教授が明治安田こころの健康財団の2007年度研究助成を贈呈される 近赤外線酸素モニターを用いた注意欠陥多動性障害研究に50万円の助成をいかす	9.20 (木)	中日 (朝刊)
18 竹中康司・工学研究科准教授が05年に発見した新たな「負膨張材料」をフルウチ化学が製造・販売	9.20 (木)	日刊工業
19 紙上ゼミナール：人と自然が調和した快適な住環境について 谷口 元・工学研究科教授	9.20 (木)	中日 (朝刊)
20 異国の文化と人を受け入れ、生まれ変わろうとしている中部の商店街 重松由美・国際言語文化研究科非常勤講師は「中部の外国人も定住を考えるなら言葉などを学ぶ努力をし、日本人は助ける体制を整えるべきだ」と話す	9.20 (木)	日経 (朝刊)
21 第17回アジア社会科学研究協議会連盟総会27～30日開催	9.20 (木) 9.28 (金)	日刊工業 中日 (朝刊)
22 中日文化センター：町田健・文学研究科教授 【町田健の「おもしろ言語学入門2」】	9.20 (木)	中日 (夕刊)
23 朝日カルチャーセンター特別講演会：福井康雄・理学研究科教授 『『おどろき』の宇宙～ここまで見えてきた、最新宇宙像』	9.20 (木)	朝日 (朝刊)
24 新エネルギー・産業技術総合開発機構は、産業技術研究助成事業の07年度研究テーマに、本学の「流路型免疫分析チップの開発」や「安全・便利な車内情報システムインタフェース」など58件を選定	9.21 (金)	日刊工業
25 がん予防・がん治療の最前線 愛知県がんセンター研究所所長・田島和雄・本学客員教授	9.21 (金)	朝日 (朝刊)
26 医学系研究科「老年学」の公開講座に理美容師の赤木勝幸さんを招き、「理美容の視点からの高齢者のQOL (生活の質)」を開催	9.21 (金)	毎日 (朝刊)
27 本学など市内の6大学の学生が「We ♥ NAGOYA 2007」24日開催	9.22 (土) 9.25 (火)	中日 (朝刊) 読売
28 風向計：家森信善・経済学研究科教授 郵貯民営化後の金融格差懸念	9.22 (土)	読売
29 日本臨床腫瘍学会第2回市民公開講座 がん薬物療法の今10月7日開催：安藤雄一・医学部附属病院准教授	9.22 (土)	朝日 (朝刊)
30 訃報：北澤正啓・本学名誉教授	9.22 (土) 9.24 (月) 9.25 (火)	日経 (朝刊) 他2社 日刊工業 中日 (朝刊)
31 本学に日本と中国の白血病の患者や治療のデータベースとなるセンターを設置	9.23 (日)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
32 新エネルギー・産業技術総合開発機構は、産業技術研究助成事業の07年度研究テーマに、本学の「多元機能溶媒を用いた低温安定相 SiC 基板結晶の溶液成長」や「“オミックス” 研究支援アクティブポリマーモノリスの創製」など58件を選定	9.24 (月)	日刊工業
33 東海スポーツ：ラグビー 愛知学院大学51－0 本学	9.24 (月)	朝日 (朝刊)
34 東海スポーツ：アメリカンフットボール 本学26－0 愛知学院大学	9.25 (火)	朝日 (朝刊)
35 エコトピア科学研究所が自然科学研究機構核融合科学研究所と連携・協力の協定締結	9.25 (火)	中日 (朝刊)
36 後 房雄・法学研究科教授は、福田内閣の自民党「新4役」について「小泉抵抗勢力が一斉に復活した印象」と話す	9.25 (火)	中日 (朝刊)
37 市民参加特別講演会「現代社会の震災像と減災戦略」26日開催：福和伸夫・環境学研究科教授	9.25 (火)	中日 (朝刊)
38 キャンパスで見つけた布製看板は、かつて愛・地球博「木の回廊」で使われていたもの	9.25 (火)	中日 (朝刊)
39 後 房雄・法学研究科教授は、古い自民党へ逆戻りの懸念のある福田新内閣で、「共産党は考え方の違いから抵抗はかなりあると思うが、現実に合わせて行動する党に脱却できるかの試金石になる」と話す	9.25 (火)	中日 (夕刊)
40 工学部6号館の放射性物質使用施設から漏水	9.26 (水)	朝日 (朝刊) 他4社
41 中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授は、「福田新内閣の教育改革には、国民の間に冷静な議論や判断ができるような政策運営を求めたい」と話す	9.26 (水)	読売
42 名古屋市教育委員に坂井克彦氏・本学卒業生が選任される	9.26 (水)	中日 (朝刊)
43 鳥取砂丘に落書きした学生らが、環境省浦富自然保護官事務所に反省文を郵送	9.27 (木)	朝日 (朝刊) 読売
44 一般向け講演会「地球のひみつー見えない地球の中を探る」29日開催	9.27 (木)	中日 (朝刊)
45 留学生に聞く「反日」「嫌中」を超えて：周 倩さん、楊 琨さん・本学大学院生	9.27 (木)	中日 (朝刊)
46 濱嶋信之・医学系研究科教授は、日本人がヘリコバクター・ピロリ菌の感染によって胃がんになりやすい体質であることをつぎとめる。「積極的に除菌した方がよい」と話す	9.27 (木)	日経 (夕刊)
47 本学と理化学研究所が「宇宙天気予報」を開発	9.28 (金)	中日 (朝刊)
48 61例目の脳死臓器移植提供により本学は肝臓を移植	9.28 (金) 9.29 (土)	朝日 (朝刊) 中日 (夕刊)
49 第22回国際経済政策研究センター・キタン国際学術シンポジウム「中国の経済発展と所得格差」10月5、6日開催	9.28 (金)	読売
50 講演会「後縦帯骨化症」10月6日開催：松山幸弘・医学系研究科准教授	9.28 (金)	中日 (朝刊)
51 「薬と健康の週間」記念講演会10月20日開催：吉川羊子・医学系研究科助教	9.28 (金)	中日 (朝刊)
52 朝日カルチャーセンター：三矢保永・本学名誉教授 雲のかたちと空の色、木俣元一・文学研究科教授 キリスト教図像学－キリストの幼年時代 (幼児伝)、近藤孝男・理学研究科教授 生命時計の不思議	9.28 (金) 10. 6 (土)	朝日 (朝刊)
53 鳥取砂丘に落書きした学生らに環境省近畿地方環境事務所は注意文書を送る	9.28 (金)	毎日 (朝刊)
54 愛知県や名古屋市の職員がメンタル面を理由に長期休業するケースが増加 尾崎紀夫・医学系研究科教授は「一人で抱え込まず、周囲は受診を勧めてほしい」と話す	9.28 (金)	朝日 (朝刊)
55 本学教員が宇都宮大学で開かれた学会出席中に個人情報入りパソコンを盗難される 地球水循環研究センターでは個人情報の入ったパソコンやデジカメなどを盗まれる	9.28 (金) 9.29 (土)	毎日 (夕刊) 他2社 読売
56 風向計：フォーイン副社長・久保鉄男さん・本学卒業生 タイの自動車輸出戦略 活発に	9.29 (土)	読売
57 読売新聞社の幹部や現役記者らが、学生に生きた講義を行う「読売新聞特別講座」 本学大学院と愛知大学で後期に開催	9.29 (土)	読売
58 案内：現代的教育ニーズ取組支援プログラム (現代 GP) に選定、大学院教育改革支援プログラムに選定	9.30 (日)	中日 (朝刊)
59 大学のゆくえ：あえぐ地方国立大学 本学は財務省試算で8割以上運営費交付金増	9.30 (日)	毎日 (朝刊)
60 分析家・河合雄雄と仏教：同朋大学大学院文学研究科長・田代俊孝・医学部倫理委員 ユング心理学との共通性を発見	9.30 (日)	中日 (朝刊)
61 博士の就職支援 本学はテンプスタッフと提携し求人情報を提供 文部科学省は昨年度、本学など12機関で企業の採用説明会や短期インターンシップ、キャリア研修などを実施	10. 1 (月)	朝日 (朝刊)
62 全日本大学女子駅伝に初出場	10. 1 (月)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
63 東海学生ラグビー：朝日大学63-0本学	10. 1 (月)	朝日 (朝刊)
64 秋期特別展『『遊心』の祝福 中国文学者・青木正兒 (まさる) の世界』附属図書館で19日まで開催 展覧会とは別に青木正兒をテーマにした講演会31日開催：井上進・文学研究科教授	10. 1 (月) 10. 6 (土)	中日 (夕刊) 中日 (朝刊)
65 「古書に学ぶ人生の生き方!!」9日愛知学院大学で開催：塩村耕・文学研究科教授	10. 2 (火)	中日 (朝刊)
66 書籍：「フィルム・アート 映画芸術入門」D・ボードウェル、Kトンプソン著 藤木秀朗・文学研究科准教授らが翻訳	10. 2 (火)	中日 (朝刊)
67 世界見て歩き：第3回国際学生フォーラムに土井康裕さん・本学大学院生らが初参加	10. 2 (火)	中日 (朝刊)
68 金城学院大学大学院英文学会第15回大会 「パウンドの魅力/パウンドの闇-いまこの詩人をどう読むか」6日開催：長畑明利・国際言語文化研究科教授	10. 2 (火)	中日 (夕刊)
69 平成19年度名古屋大学鶴舞公開講座「もうすぐ手に届く治療とはじめ：そんなことができるの!」27日開催：吉田純、上田実・医学系研究科教授、沼口靖・医学部准教授	10. 3 (水)	読売
70 時のおもりの総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 家電の寿命戦略 転換の時	10. 3 (水)	中日 (朝刊)
71 もっと知りたい：福和伸夫・環境学研究科教授は、1日から始まった緊急地震速報について「従来から言われている防災対策の重要性が改めてわかる。防災意識を変えるきっかけにもなる」と話す	10. 4 (木)	朝日 (朝刊)
72 読売講座：「読売新聞特別講座」3日開催	10. 4 (木)	読売
73 本学 タイのチュラポーン研究所、その併設機関のチュラポーン大学院大学、チュラポーンがんセンターと学術交流協定合意	10. 5 (金)	日刊工業
74 石黒直樹・医学系研究科教授は、「医師が腰痛やひざの痛みの鎮痛剤エヌセイドを処方するときは、胃粘膜傷害の副作用を予期するべきだ」と話す	10. 5 (金)	中日 (朝刊)
75 わが友わが母校：鍋屋バイテック社長・金田光夫氏・本学卒業生 読書と音楽鑑賞に没頭	10. 5 (金)	日刊工業
76 「名古屋大学リウマチ療養相談会」11日開催	10. 5 (金)	中日 (朝刊)
77 津田佳紀「歴史画のための調書」展9～19日開催	10. 5 (金)	中日 (朝刊)
78 趙彦民さん・本学大学院生の論文「満州愛国信濃村の生活」8月出版 中国残留孤児たちの日中両国での苦難に満ちた生活史をまとめる	10. 5 (金)	朝日 (夕刊)
79 本学 益川敏英・京都産業大学理学部教授を特別招聘教授に委嘱	10. 6 (土)	読売
80 講演会「中東の女性たちは今-新世代のアイデンティティと政治意識」7日開催：中西久枝・国際開発研究科教授	10. 6 (土)	中日 (朝刊)
81 力士の急死問題 本学相撲部師範・細谷辰之さんは「協会はまず、外部の人間も入れて独自に調査する必要がある」と対応のまずさを指摘	10. 6 (土)	中日 (朝刊)
82 川合伸幸・情報科学研究科准教授らが、人間がヘビやクモを怖がるのは、経験によるものではなく進化の過程ですり込まれたものという仮定を、ニホンザルを使った実験で確かめる	10. 7 (日)	朝日 (朝刊)
83 本学と朝日新聞社の共同チームが11日、ヒマラヤ氷河の大規模調査に出発	10. 7 (日)	朝日 (朝刊)
84 近藤孝男・理学研究科教授が、「生物時計」の周期を決める仕組みを解明	10. 8 (月)	朝日 (朝刊)
85 アーチェリー：東海学生新人選手権大会 男子団体3位、未経験者の部1位・栗田健次さん・本学学生 女子未経験者の部3位・真田那奈子さん・本学学生	10. 8 (月)	読売
86 ラグビー東海学生Aリーグ：愛知工業大学19-12本学	10. 9 (火)	読売
87 文部科学省出身者が国立大学に65人天下り 本学理事に元文部科学省伝統文化課長	10. 9 (火)	中日 (朝刊)
88 原口紘丞・本学名誉教授が唱えた学術用語、「Metallomics (メタロミクス)」が一般的に広まり始める	10. 9 (火)	日刊工業
89 第5回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム5日開催	10. 9 (火)	中日 (朝刊)
90 「諏訪兼位 アフリカの旅」2～13日開催：諏訪兼位・本学名誉教授のスケッチと短歌を組み合わせた企画展	10. 9 (火)	中日 (朝刊)
91 College mode：高木賢治さん・本学大学院生 研究助成金の申請	10. 9 (火)	中日 (朝刊)
92 第10回全日本学生グライダー新人競技大会14～20日開催：金井謙二さん、小林俊一さん・本学学生が出場	10. 9 (火)	朝日 (朝刊)
93 第12回青雀旗争奪全国大学対抗麻雀選手権大会8日開催：横山源太さん、大野俊也さん・本学学生が3位	10. 9 (火)	毎日 (朝刊)
94 本学のルーツである愛知医学校・愛知病院の記念碑が完成 9日に完成式典開催	10.10 (水) 10.12 (金)	読売 中日 (朝刊)
95 育毛研究に取り組む桑名隆一郎氏・本学卒業生	10.10 (水)	読売
96 ミクロの探検隊-電子顕微鏡を使ってみよう-11月3日から4回開催	10.10 (水)	毎日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
97 メカトロテックジャパン2007 10月17～20日開催：高井治・エコトピア科学研究所教授、石川孝司、社本英二・工学研究科教授	10.10 (水)	日刊工業
98 本学、理化学研究所、NTT ドコモ東海が共同で、内視鏡手術中に施術者へ鉗子を手渡す作業ロボットを開発	10.10 (水)	日刊工業
99 訃報：西條八束・本学名誉教授	10.11 (木)	朝日 (朝刊) 他5社
	10.12 (金)	中日 (朝刊)
100 東海・北陸地区 国立大学合同進学説明会14日開催：本学他10大学が参加	10.11 (木)	中日 (朝刊)
101 高橋隆・医学系研究科教授らは、切除した肺がん細胞の遺伝子から再発リスクを予測する検査法を開発	10.11 (木)	朝日 (夕刊)
102 河野荘子・教育発達科学研究科准教授 子どもの犯罪と親子関係	10.11 (木)	朝日 (夕刊)
103 大学休学中にイラン旅行をしていた日本人大学生が、誘拐された事件について本学では、「海外旅行のために休学する学生が、どの程度いるか把握していない」と説明する	10.11 (木)	中日 (夕刊)
104 「食の安全・安心」をテーマに「消費者懇談会」開催：竹谷裕之・生命農学研究科教授	10.12 (金)	中日 (朝刊)
105 遺伝子情報の利用：濱嶋信之・医学系研究科教授 自由診療で遺伝子検査	10.12 (金)	中日 (朝刊)
106 「木曾川水系流域委員会」(委員長・辻本哲郎・工学研究科教授)が、徳山ダムの導水路などを集中審議	10.12 (金)	中日 (朝刊)
107 東海地方9月の地震：林 能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教	10.12 (金)	読売
108 昨秋、交通事故で亡くなった伊藤公一郎さん・元本学大学院生の遺族が、自ら目撃者を捜す	10.12 (金)	中日 (朝刊)
109 「航空宇宙シンポジウム2007」23、24日吹上ホールで開催	10.13 (土)	中日 (朝刊)
110 映画「日本の青空」つるまい上映会20日開催：森 英樹・本学名誉教授	10.13 (土)	中日 (朝刊)
111 ジョン・ギャスライト氏が生命農学研究科博士課程修了 “木登り博士”となる	10.13 (土)	中日 (朝刊)
112 中部を彩る：NPO 法人 アスクネット代表・毛受芳高氏・本学卒業生 市民講師 教室に呼び込む	10.13 (土)	日経 (夕刊)
113 中日新聞を読んで：中西久枝・国際開発研究科教授 忘れるな、教育再生問題	10.14 (日)	中日 (朝刊)
114 今さら聞けない：鷺谷威・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター准教授は、阪神大震災以降に整えられた国土地理院のデータを解析し、ひずみ集中帯の姿を表す	10.14 (日)	朝日 (朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**10月2日(火)～12月18日(火)の
毎週火曜日**

場 所：国際開発研究科棟 8 階
多目的オーデトリウム
時 間：18時00分～20時00分 (全12回)
受 講 料：10,200 円
(テキスト・資料代含む)
※事前申込み締切ました。

公開講座「途上国開発戦略の基本と最先端」

内 容：地球人口の8割を占め、今後の人口増加のほとんどを占めるようになる途上国の開発は、世界の大課題である。国連では2000年に「21世紀開発戦略」を出したが、そこに込められた諸課題はどのような構成を持ち、実現可能性はどうか、そういう戦略でいいのか、多くの議論がある。現時点で、途上国の開発の現状、これまでの経過、今後の展望はどのようになっているのか、中間総括的な議論を提示し、参加者の世界認識向上に寄与する。

[問い合わせ先]
国際開発研究科事務掛 052-789-4952

**11月3日(土)、12月22日(土)、
1月12日(土)、2月2日(土)**

場 所：医学部医学教育研究支援
センター超微形態室
時 間：13時00分～16時00分
定 員：10名
対 象：小学5年生以上
参 加 費：100円 (保険料)

**ミクロの探検隊
～電子顕微鏡を使ってみよう～**

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

**11月10日(土)、11月17日(土)、
11月24日(土)**

場 所：理1号館 (多元数理科学研究科)
552号室
時 間：15時00分～17時00分
参 加 費：無料

数学アゴラ 秋の継続コース

テ ー マ：多面体をめぐって
講 師：金井雅彦 (多元数理科学研究科教授)

[問い合わせ先]
多元数理科学研究科
金井雅彦 052-789-5603

11月15日(木)・16日(金)

場 所：環境総合館レクチャーホール
※15日のシンポジウムは一般公開、
他は非公開

**名古屋大学・上海交通大学
第1回「日中環境研究交流会」(仮題)**

日 程：第1回日中環境シンポジウム
「南水北調-中国の経済発展と水資源の政策的・技術的課題」
(公開)、
レセプション (15日)

[問い合わせ先]
国際企画室 (沈) 052-788-6262
環境学研究科事務部 052-789-3454



11月17日(土)

場 所：東山キャンパス
時 間：9時00分～11時30分
(キャンパス探鳥会)
13時00分～14時30分
(セミナーハウス)
定 員：20名
対 象：小学5年生以上
参 加 費：50円 (保険料)

地域貢献特別支援事業

**「鳥っておもしろい
～キャンパス探鳥会&骨から見るトリ～」**

講 師：蛭薙観順 (博物館准教授)、新美倫子 (博物館准教授)

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

11月19日(月)

場 所：中央図書館 5階多目的室
時 間：18時00分～19時15分
入 場 料：無料

附属図書館研究開発室
第28回オープンレクチャー

演 題：未定
講 師：伊藤大輔（文学研究科准教授）

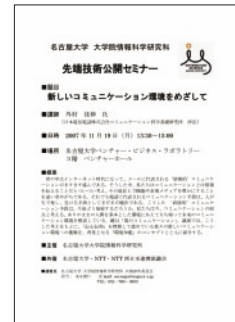
[問い合わせ先]
附属図書館庶務掛 052-789-3667

11月19日(月)

場 所：ベンチャービジネス
ラボラトリー 3階
ベンチャーホール
時 間：13時30分～15時00分

先端技術公開セミナー
講 演 者：外村佳伸 NTT-CS 研究所所長

[問い合わせ先]
情報科学研究科
末永康仁教授 052-789-3809



11月21日(水)

場 所：野依記念物質科学研究館
2階講義室
時 間：10時30分～12時00分
入 場 料：無料

社会と科学
「日本学術振興会について」

今野美智子 お茶の水女子大学教授

[問い合わせ先]
理学研究科物質理学専攻（化学系）
小谷 明 052-789-2954

11月23日(金)～25日(日)

場 所：IB 電子情報館他
時 間：9時00分～18時00分
参加登録費：4万円（当日）

エコトピア科学に関する国際シンポジウム2007 (ISETS07)

内 容：エコトピア科学に関する講演
(基調講演3、キーノート講演18、一般講演約330)

[問い合わせ先]
ISETS07事務局 052-789-4310

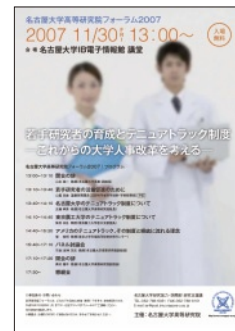
11月30日(金)

場 所：名古屋大学 IB 電子情報館
大講義室
時 間：13時00分～
入 場 料：無料

高等研究院フォーラム2007
テ ー マ：若手研究者の育成とテニュアトラック制度
ー これからの大学人事改革を考えるー

- プログラム：
開会の辞（13：00～13：10）
1. 若手研究者の活躍促進のために：
山脇良雄 文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課長（予定）
(13：10～13：40)
 2. 名古屋大学のテニュアトラック制度について：
近藤孝男 名古屋大学高等研究院院長、教授 (13：40～14：10)
 3. 東京農工大学のテニュアトラック制度について：
柴田治呂 東京農工大学若手支援室長、教授 (14：10～14：40)
 4. アメリカのテニュアトラック、その制度と根底に流れる理念：
菅 裕明 東京大学先端科学技術研究センター教授
(14：40～15：20)
 5. パネル討論会（15：40～17：10）
司会 坂神洋次 高等研究院副院長、教授
- 閉会の辞（17：10～17：20）
懇 親 会（17：30から）

[問い合わせ先]
研究協力・国際部
研究支援課高等研究院掛
052-788-6051、6153



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

11月30日(金)

場 所：野依記念学術交流館
時 間：14時00分～17時30分
入 場 料：無料

樹木医学会第12回大会公開シンポジウム

公開シンポジウムでは一般の方にも公開し、「ブナ科樹木の萎凋枯死被害(ナラ枯れ)の研究と防除の最前線」をテーマに、研究の最前線にいる先生方からホットな話題を提供します。

テ ー マ：「ブナ科樹木の萎凋枯死被害(ナラ枯れ)の研究と防除の最前線」

司 会：梶村 恒(生命農学研究科助教)

講 演：

伊藤進一郎(三重大学)

「わが国におけるブナ科樹木萎凋枯死被害(ナラ枯れ)の現状」

山田利博(東京大学)

「病原菌からみたブナ科樹木萎凋枯死被害(ナラ枯れ)研究の最前線」

鎌田直人(東京大学)

「カシノナガキクイムシからみたブナ科樹木萎凋枯死被害(ナラ枯れ)研究の最前線」

小林正秀(京都府立大学)

「ブナ科樹木萎凋枯死被害(ナラ枯れ)防除の最前線—防除現場から」

[問い合わせ先]

生命農学研究科

柴田叡式 052-789-4054



12月1日(土)

場 所：経済学研究科
カンファレンスホール
時 間：10時00分～12時00分

名古屋大学オープンカレッジ・

「自由奔放！サイエンス」

講演内容：「東南アジア熱帯林での林冠研究」

講 演 者：中川弥智子(生命農学研究科准教授)

[問い合わせ先]

経済学研究科エクステンション・サービス

Fax：052-788-6197

URL：http://www-oc.soec.nagoya-u.ac.jp/

E-mail：ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp

12月1日(土)、2日(日)

場 所：名古屋大学博物館(12/1)、
名古屋市内(12/2)
時 間：13時30分～16時30分(12/1)、
9時00分～15時00分(12/2)
定 員：30名
対 象：小学3年生～中学3年生と
その保護者
参 加 費：700円

第4回地球教室(親子対象フィールドセミナー)

「ナゴヤで化石をさがそう！」



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

12月7日(金)

場 所：中央図書館5階多目的室
時 間：18時00分～19時30分
入 場 料：無料

附属図書館友の会トークサロン

第10回ふみよむゆふべ

演 題：「ユダヤ人・女性・詩人—エルゼ・ラスカー＝シューラーの手紙」

講 師：山口庸子(国際言語文化研究科准教授)

[問い合わせ先]

附属図書館友の会事務局 052-789-3666

12月7日(金)

場 所：環境総合館1階
レクチャーホール
時 間：18時00分～19時30分
入 場 料：無料

第35回防災アカデミー

演 題：「強く安全な建物をどう造るか

—技術開発の検証としての役目を果たす構造実験」

講 演 者：中島正愛 京都大学防災研究所教授

[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

taisaku@seis.nagoya-u.ac.jp

http://anshin.seis.nagoya-u.ac.jp/taisaku/

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

12月8日(土)

場 所：経済学研究科
カンファレンスホール
時 間：10時00分～12時00分

**名古屋大学オープンカレッジ・
「自由奔放！サイエンス」**

講演内容：「教育改革の系譜をたどる」
講 演 者：吉川 卓治（教育発達科学研究科准教授）

[問い合わせ先]

経済学研究科エクステンション・サービス
Fax：052-788-6197
URL：http://www-oc.soec.nagoya-u.ac.jp/
E-mail：ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp

12月8日(土)

場 所：東山キャンパス内
時 間：9時00分～11時30分

キャンパス探鳥会

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

12月9日(日)

場 所：野依記念学術交流館
時 間：13時30分～16時30分
定 員：200名（先着順）
参 加 費：無料

**環境医学研究所 市民公開講座
「知っておきたい甲状腺の病気」**

[問い合わせ先]

環境医学研究所生体適応・防御研究部門
発生・遺伝分野 052-789-3875

12月15日(土)

場 所：環境総合館1階
レクチャーホール
(あわせてホールにて展示、
1階ラボと4階「地域防災ホール」を開放)

第9回まちとすまいの集い

テ ー マ：「地球温暖化と都市・建築」

[問い合わせ先]

環境学研究科
清水裕之教授 052-789-3745

1月30日(水)

場 所：総合保健体育科学センター
会議室
時 間：16時30分～
入 場 料：無料

コロキウム

講演内容：「大学体育必修の根拠を探る」
講 演 者：出原 泰明（総合保健体育科学センター教授）

[問い合わせ先]

総合保健体育科学センター
小川豊昭 052-789-5836

名大トピックス No.174 平成19年11月15日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

本学弓道場で行われた試合の様子（弓道部）
(平成19年4月1日)



67 伊勢湾台風と名古屋大学

今年もいくつかの台風が日本列島を通過して大きな被害をもたらしましたが、戦後の東海地方が甚大な被害をこうむった台風といえば、やはり1959（昭和34）年9月の伊勢湾台風がまさきに挙げられるでしょう。

上陸時の中心気圧が929.5hPaというこの超大型台風により、愛知県では約3,300人の死者・行方不明者、約5万6,000人の負傷者を出し、被害総額は3,224億円にのぼりました。もちろん名大も例外ではありませんでした。死者は1名にとどまりましたが、教職員は家屋の半壊以上59名、床下浸水88名をはじめとする大きな被害をうけました。また、7割の学生が何らかの被災に遭っています。

被害も、当時は老朽化した木造建築物が多かったことから、極めて大きなものとなりました。台風の翌年に作成された調書によれば、被害見積もり額は約1,600万円、復旧見込み額は約4,900万円とされています。小学校教員の初任給が1万円に満たなかった時代です。

その一方で、被災者の救援活動に名大関係者が多く携わりました。学生大会は救援活動への積極的参加を議決し、教養部学生災害対策本部が結成されました。これにより、のべ3,000人の学生が、泥海が残る過酷な状況で救援活動に従事し、社会の大きな共感をよびました。

医療活動においては、医学部や附属病院の関係者が大きな役割をはたしました。附属病院では、7名からなる風水害罹災者救護班が7つ編成され、行政の要請に応じて出動しました。医学部学生も、授業に替わる実習として救護班に参加したほか、独自に医療班を結成して被災各地をまわりました。

愛知県議会は、名大の教職員や学生による救援活動に対し、感謝決議をおこなっています。しかし、以上のような被災と活動のため、授業や試験が半月以上も中断し、教養部の文化祭は中止をよぎなくされました。



1	2	3
4		

- 1 屋根が吹き飛ばされた教養部（瑞穂キャンパス）の体育館。屋根を失った建物は限られているが、ほとんどの瓦が飛ばされてしまった建物は少なくない。
- 2 文字通りの「泥海」の中を行き交う人々。救援物資を運ぶ学生の姿が見える。
- 3 名古屋近辺の大学生が結成した「被災学生を守る会」による記録雑誌『伊勢湾台風』（1960年4月）。当時としては異例の1万部を発行した。
- 4 台風直後の農学部校舎（安城キャンパス）。仮設建物が多いこともあり、ほとんどの校舎が大きなダメージをうけた。実験器具や装置は、遠くまで吹き飛ばされたものもあり、修理をせずに使えるものはほとんどなかったという。